
キッズパフォーマンス

ブルーバード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キッズパフォーマンス

【Nコード】

N5944P

【作者名】

ブルーバード

【あらすじ】

栗野 海 10歳

将来のダンサーに期待されている。

そんなある日、世界有名ダンサーがスカウトに！
どうなる海。

ある町に、将来のダンサーに期待されている少年がいた。

名前は、栗野^{くりの}海^{うみ} 10歳

劇団に入っている。

ダンスが上手でよく先生からもほめられる。

学校では、発表もしないテストの点が悪い優等生ではない。
体育では、上のほうだ。

そんなある日、彼をスカウトに来た人がいた。

その名は、ステップ・マイケル。

世界の有名ダンサー。

ツアーでたまたま日本にきていた。

そして、海のうわさをかぎつけてきたみたいだ。

ピンポン

「はい」

ガチャリ。

「コンニチハ、私ステップ・マイケルでございます。」

「あー！あの、マイケルさんだあー」

「海くんだよね？」

「うん！ってかなんで僕の名前知ってんの？」

「噂をかぎつけたのさ」

「ふうーん」

「それより、君をスカウトしにきたんだ」

「えーーーーー！」

「今度、アメリカで公演があるから君にでて欲しい」

「だって僕そんなに・・・。」

「いいの、いいの費用はこちらで払うから」

「僕……。自信ない。」

「大丈夫さ。君ならきつとできる。明日、午後3時に練習がある。やる気があるならおいで。」

「うん？」

「これ、お家の人と相談して書いてね。」

「うん。」

「それじゃあ。明日、君が来るのを楽しみにしてるよ。」

「明日。いきます。」

「バぁーイ」

帰って行った。

そして、その夜。

「僕、アメリカの公演出たい！」

「ムリムリ、お前はまだ未熟だ」

「だって、マイケルさんは僕を認めたんだ」

「マイケルさんが認めてもほかの人は認めてくれないかもよ」

「でも、僕は出たい。明日練習に行く約束したんだい」

「公演は、12月23日。今週の土曜日よ。」

「お願い。僕どうしても出たい。こんなチャンスもうないかもしれないんだ。」

「そうだけど……」

「ねえー、お願い。」

少し泣き目になって、とうとう泣き始めた。

「分かった。分かった。考えとく。ただし、駄目だと言っても文句なし。」

「うん、分かった」

「分かったならいいわ。今日は、遅いから寝なさい。」

「はぁーい」

「お休み……。」

「お休みなさぁーい」

海は、楽しみで眠れないほどドキドキしていた。

つぎの日の朝

海は、いつもよりはやくおきた。

そして、いつもよりはやく学校に行った。

「ねえ、希世史^{きよじ}」

「なんだよ」

希世史は、海が一番の友達である。

「僕ね、マイケルにスカウトされて今週のアメリカで行われる公演にでるかもしれないんだ。」

「えー！ー！すげーじゃん。」

「でも、親が反対するんだ。」

「きびしいなあー。俺の母ちゃんは、すぐにOKだすけどなあー」

「僕、お願いしたんだよ。だけど・・・」

「だけど？」

「まあーそれは、おいといて今日その練習があるんだよおー」

「えっ・・・」

「練習に、行つていいとかの返事を聞くのが今日なんだよ」

「ふうーん。OKがでたらいいね」

「うん」

そして、帰り道・・・。

僕、絶対に出たい。心の中で思った。

「ただいまあー」

「おかえり」

家に着いたのが、2時45分。

「海ー、早く道具を持って練習にいきなさあーい」

海は、ドキッ、とした。

海は、うれしかった。

「ありがとう。お母さん」

そして、道具を持って家を出た。

「マイケルさあーん」

「おっとー海君、来たね。」

「お願いします」

「どうぞ、さあー練習をはじめよう」

「はい」

そして、ハードな練習がはじまった。

5時間にわたった練習が終わった。

「明日もがんばれ、海君」

「はい。ありがとうございました。」

「あつと、忘れてた。」

「なんですか？」

「明日から、朝8時から夜7時までの練習となる。だから、この一週間だけ学校を休まなければならない。それでもいいか？」

「はい。大丈夫です。」

「あと、金曜日の夕方5時の飛行機にのることになっている。このことをちゃんと伝えてね」

「はい」

「じゃー、バイバイ」

「ばいばい」

海は、走って家に帰った。

そして、つぎの日から学校を休み、毎日練習に行った。

金曜日・・・

いよいよつぎの日に向けて海とマイケルをのせた飛行機が出発した。

「マイケルさん」

「ん？」

「ホントに僕でよかったんでしょうか」

「大丈夫、安心しろ」

海は、ホテルについても、なかなか落ち着かなかった。

土曜日・・・

「マイケルさん」

「なに？」

「おはよう」

「おはよう？」

海は、少し緊張していた。
プるる、プるる

「もしもし」

「よつす、海」

「その声は、」

「海、俺だよ希世史だよ。」

「希世史！」

「応援の電話だよ。」

「希世史、ありがとう。」

「いやいや、俺も海のこと心配になって」

「ぼつ、僕すうーごく緊張してるんだ」

「緊張すんなって、本番でまちがえんなよ」

「うん、希世史の声を聞いたら緊張がとけた気がする」

「よかったあー。じゃー俺もう塾の時間だから、切る。」

「バイバイ」

「バイバイ頑張れ」

「ツー、ツー、ツー。」

海は少し、元気になったようだ。

「おーい、海！」

「なあーに、マイケルさん」

「移動するから、早く準備してロビーに来てー」

「はい。」

海は、準備をしてロビーに行った。

そこからバスに乗り、一足早くマイケルさんと会場に行った。
今は、9時25分。

公演は、1時30分～5時20分。

今日は、ハードな1日となりそう。

「おーい、海」

前方に見えるのは、お父さんと、お母さん。

「わぁーい」

「海、今日の公演見に来た。」

「ありがとう」

「それより海」

「ん？」

「練習は・・・。」

「あーーーーーっ。行かなきゃあー」

海は、急いで練習へ行った。

やっぱり、練習から疲れ果てていた。

12時・・・。

本番まで、1時間半。

きゆうに、緊張してきた。

そして、本番2分前。

メールがきていた。

海へ

緊張しないで頑張れ。

俺には、海がステージに立っているのが思い浮かぶ。

俺にはそっちの様子がわかんねえーけど、

海が、活躍すると思うとは・・・。

写真送ってくれよ。

希世史

うれしくて涙がでそうだった。

そして、音楽になった。

ジャカジャカジャカジャカジャン

「キッズパフォーマンス、海&ステップ・マイケル」

ヒューヒュー。

会場は、盛り上がった。

笑顔で海は演技する。

大技の空中10回転成功。

観客からのエールと、希世史の応援でアメリカ公演が終了した。

「海……。」

「はい」

「大成功」

「うん」

なんとなくうれしかった。

日本に帰って……。

みんなから迎えられてうれしい。

つぎの日

「海……。」

「希世史！」

「よかったなあー」

「うん」

「成功してよかったな」

「うん、だいたいうまくいったし満足」

「俺も見えたかったー。」

「写真だけでいいじゃん」

「ちえー」

キッズパフォーマンス お・わ・り

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5944p/>

キッズパフォーマンス

2010年12月30日22時24分発行